

スペイン語の「未来」と「過去未来」：その機能的類似点と相違点について

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/2560387>

出版情報：言語文化論究. 44, pp.11-26, 2020-03-13. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

スペイン語の「未来」と「過去未来」

—その機能的類似点と相違点について*—

山 村 ひろみ

0. はじめに

本稿はスペイン語の「未来」と「過去未来」¹の機能的類似点と相違点について論じるものである。スペイン語の「未来」と「過去未来」については、同じ単純時制である「現在」、「点過去 (pretérito perfecto simple, 以下, ps)」、「線過去 (pretérito imperfecto, 以下 imp)」に比べると、その機能をめぐって多くの議論が交わされ、いまだ統一の見解が見いだせない状態にあると言える。その議論は、周知のとおり、「未来」と「過去未来」は果たして時制なのか、それとも、法なのかというものであったが、この議論の際に、「未来」と「過去未来」が常に一括して扱われてきたのは非常に興味深い。というも、スペイン語の「未来」と「過去未来」に相当する他のロマンス諸語においては、例えば、フランス語のように、「未来」は直説法の時制であるが、「過去未来」は「条件法現在」と名付けられ、「未来」とは異なる法の「現在」と見なすということが珍しくないからである。そこで、本稿はこれまでスペイン語学では当たり前のように一括して扱われてきた「未来」と「過去未来」の機能の異同を改めて検証することを目指す。

以下、本稿の構成は次のとおり。第1節では Real Academia Española (王立スペイン学士院、以下 RAE)における両形式の扱いについて述べる。第2節では、スペイン語の「未来」の諸用法と「未来」の機能の関係、続く第3節では、スペイン語の「過去未来」の諸用法と「過去未来」の機能の関係について述べ、最後の第4節では、第2節と第3節で論じたことに基づき、スペイン語の「未来」と「過去未来」の機能的類似点と相違点についてまとめる。

1. Real Academia Españolaにおける「未来」と「過去未来」の位置付け

本節ではスペイン語の「未来」と「過去未来」の由来を簡単に説明した後、RAEにおける両形式の扱いについて述べる。

まず初めに、スペイン語の「未来」と「過去未来」の由来について簡単に触れておく。スペイン語の「未来」は、ラテン語の「義務」を表す迂言形式“不定詞+habeo (habere 現在形)”、また、「過去未来」は、同じ迂言形式の“不定詞+habebam (habere 未完了過去形)”から生じたものである。この点については、他のロマンス諸語、例えば、フランス語の「未来」、スペイン語の「過去未来」に相当する「条件法現在」、また、ポルトガル語の「未来」、「過去未来」と共通する²。しかし、これら二形式の文法における扱い、とりわけ、「過去未来」の位置付けについては、次に見るようないくつかの変遷を経てきた。

スペイン語の規範を定める RAE における当該二形式の扱いを見ると、1931年版では、「未来」は futuro simple de indicativo (直説法単純未来) のように直説法とされているが、「過去未来」は modo potencial simple (条件法単純) というように直説法とは異なる法が付与されている。一方、1973年版では「未来」は futuro de indicativo (直説法未来)、「過去未来」は condicional de indicativo (直説法条件)、そして2009年に出版された *Nueva gramática de la lengua española* (『スペイン語新文法』、以下 *NGLE*) でも、「未来」は futuro simple de indicativo (直説法単純未来)、また、「過去未来」も condicional simple de indicativo (直説法単純条件) というように直説法に組み入れられている。

このように、その法的位置づけが揺れてきた「過去未来」が RAE の1973版以降現在まで直説法と見なされてきた背景には、それが出現する統語環境が重視されたことがあるらしい。Vatrican (2006) によれば、RAE が「過去未来」に直説法を付与したのは、次の例に見られるように、「過去未来」が直説法の「線過去」「点過去」と同じ統語環境に出現するというのが決め手になったというからである。

- (1) [Sabía/Afirmó] que tus intereses prosperarían (cond)/prosperaban (imp)/prosperaron (ps)/*prosperen (接続法現在、以下 spr)/*prosperaran (接続法過去、以下 sp)³. (Vatrican 2006: 23)
彼は君の身代が栄える/栄えていた/栄えたと [知っていた/断言した]
- (2) [Dudaba] que *te gustaría (cond)/*te gustaba (imp)/*te gustó (ps)/te guste (spr)/te gustara (sp). (Ibid.)
彼は君が彼のことを好きということ/好きだったこと/気に入ったということ [疑っていた]

例(1)の主動詞 saber (知る)、afirmar (断言する)はいずれも従属節に直説法の動詞形式しか取ることができないものだが、「過去未来」は「線過去」「点過去」と同様に問題なくそれらの従属節に出現できる。一方、例(2)の主動詞 dudar (疑う)は逆にその従属節に接続法の動詞形式しか取ることができないのだが、「過去未来」は接続法の動詞形式とは異なり、その従属節には出現することができない。Vatrican (2006: 23)によれば、このような言語事実から「過去未来」は「線過去」「点過去」と同じ直説法に属すものと見なされることになったのである。

2. スペイン語の「未来」の諸用法と「未来」の機能

本節では、スペイン語の「未来」の主たる用法を提示し、それらが「未来」の機能とどのような関係を持つのかを見ていきたい。一般に、スペイン語の未来には、「時間的用法 (usos temporales)」、「推量的用法 (usos de conjetura)」、「必然的用法 (usos de necesidad)」の3つの用法が認められている。そこで以下では、この順に各用法がどのようなものか、また、それらが「未来」のどのような機能の現れと見なすことができるかを考えていきたい。

2.1. 「時間的用法」と「未来」の機能

「未来」の「時間的用法」の典型例は例(3)から例(6)に見られるものである。

- (3) Mañana lloverá (fut) en gran parte del país. 〈予言・予測〉
明日は国の大部分で雨が降る。 (Rodríguez Rosique 2017: 69)
- (4) Cuando llegues (spr) a Tokio, ya será (fut) de noche.

- 君が到着するときには、もう夜になっている。(作例)
- (5) Este fin de semana te ayudaré (fut) con los deberes. (約束)
- 今週末私はあなたの宿題を手伝う。(Rodríguez Rosique 2017: 59)
- (6) Esta tarde limpiarás (fut) tu habitación. (命令)
- 今日の午後君は部屋を掃除する。(Ibid.)

上の例はいずれも当該事態が発話時以後に生起すること、あるいは、当該事態が発話時以後の時点と同時的關係にあることを示したものである。そのうち、例(3)(5)(6)の「未来」は、当該事態が発話時以後に生起することを表しているが、当該事態の主語の特徴により異なる解釈が付与される。例えば、無生物主語の例(3)の「未来」は「予言・予測」、主語が話し手を示す例(5)の「未来」は「約束」、主語が相手を示す例(6)の「未来」は「命令」といった具合である。一方、例(4)の「未来」は発話時以後の時点、ここでは「君が東京に到着する時点」であるが、その未来の時点と同時的關係にある事態を表している。

以上の「未来」の時間的用法を「未来」の機能という観点から見ると、次のようになる。

- 例(3)(5)(6): 当該事態の発話時以後の生起: (A) O(~Prop [osición] & Prop.)^{pos}
 発話時: O(rigen)
 当該事態の生起: ~Prop. & Prop. <当該事態の未成立(~Prop.)から成立(Prop.)への変化>
 以後: pos (terioridad)

まず、例(3)(5)(6)の「未来」については、「当該事態の発話時以後の生起」を示すもので、(A)の記号 O(~Prop[osición] & Prop.)^{pos} で表される。Oは「発話時」、その次の記号(~Prop.&Prop.)は「当該事態の未成立から成立への変化」、posはその変化が基準時より「以後」に起こることを表している。このうち「未来」が示す「当該事態の未成立から成立への変化」は「点過去」と共通した特徴である。以下の例を見られたい。

- (7) Juan escribirá (fut)/escribió (ps) una carta. *Pero no la terminará (fut)/terminó (ps).
 フアンは手紙を一通書く / 書いた。しかし、それを書き終わらない / 書き終わらなかった。
 (Gennari 2000: 272)

例(7)が示すように、当該事態の「未来」による表出は「点過去」による表出と同じ振る舞い、すなわち、当該事態の「成立」を表すことから、その「成立」と矛盾するような文を後続させることはできないのである。

一方、例(4)の「未来」は「当該事態の既定の未来時に対する「同時性」」を示すもので、以下の(B)の記号で表される。

- 例(4): 当該事態の既定の未来時に対する同時性: (B) FoV
 既定の未来時: F(uturo) = Cuando llegues (spr) a Tokio
 同時性: oV <当該事態の現在形による表出> = ya es de noche

Fは「既定の未来時」、例(4)で言えば、cuando llegues a Tokio が示す時点（「君が東京に到着する時点」）で、当該事態はこの時点に対する「同時性」を示している。この「同時性」は「線過去」「現在」と共通した特徴であるが、「未来」では当該事態が「状態的事態」のときにしか現れない。次の例を見られたい。

- (8) a. Cuando llegaste (ps), estaba (imp) en casa. 君が到着したとき、私は自宅にいた。
 b. Cuando llegues, estaré (fut) en casa. (同時的)
 君が到着するとき、私は自宅にいる。

例(8b)の状態的事態 [yo estar en casa (私が自宅にいること)] の「未来」による表出は、例(8b)の同事態の「線過去」による表出と同じく、cuando 節の事態 [(tú) llegar (君が到着すること)] が生じた時点に対して同時的関係にある事態を表している。しかし、このような cuando 節の事態に対する「同時性」は、以下の例が示すように、非状態的事態の「未来」による表出では表されないものである。

- (9) a. Cuando llegaste (ps), trabajaba (imp) en la oficina.
 君が到着したとき、私はオフィスで仕事をしていた。
 a'. Cuando llegues (spr), trabajaré (fut) en la oficina. (継起的)
 君が到着するとき、私はオフィスで仕事をする。
 b. Cuando llegues (spr), estaré trabajando (fut 進行形) en la oficina. (同時的)
 君が到着するとき、私はオフィスで仕事をしている。
- (10) a. Cuando llegaste (ps), escribía (imp) una carta.
 君が到着したとき、私は手紙を一通書いていた。
 a'. Cuando llegues (spr), escribiré (fut) una carta. (継起的)
 君が到着するとき、私は手紙を一通書く。
 b. Cuando llegues (spr), estaré escribiendo (fut 進行形) una carta. (同時的)
 君が到着するとき、私は手紙を一通書いている。
- (11) a. Cuando partiste (ps) para Barcelona, llegaba (imp) a Madrid.
 君がバルセロナに発ったとき、私はマドリーに到着しつつあった。
 a'. Cuando partas (spr) para Barcelona, llegaré (fut) a Madrid. (継起的)
 君がバルセロナに発つとき、私はマドリーに到着する。
 b. Cuando partas (spr) para Barcelona, estaré llegando (fut 進行形) a Madrid. (同時的)
 君がバルセロナに発つとき、私はマドリーに到着しつつある。

例(9)は Vendler の分類の activity 類、例(10)は同じく accomplishment 類、例(13)は achievement 類の事態が「未来」で表出されたものであるが、それらはいずれも cuando 節の事態に対して「継起的」な関係を示しており、それらが例(8)の状態的事態 [yo estar en casa] のように cuando 節の事態に対して同時的関係にあることを示すためには、“estar+gerundio” からなる進行形の「未来」によって表出する必要がある。

2.2. 「推量的用法」と「未来」の機能

次に、「未来」の「推量的用法」を見る。まず、例(7)(8)を見られたい。

(12) A: ¿Qué hora es ahora? 今何時?

B: Ya serán (fut) más de las ocho. もう8時過ぎだろう。 (作例)

≒ Probablemente ya son más de las ocho. たぶんもう8時過ぎだ。

(13) Juan ya tendrá (fut) más de treinta años. フアンはもう30歳過ぎだろう。 (作例)

≒ Probablemente Juan ya tiene más de treinta años. たぶんフアンはもう30歳過ぎだ。

いずれの例も「たぶん」という意味の副詞 probablemente を伴った「現在」の文にほぼ等しいことから、この用法の「未来」は、発話時に対して「同時的」関係にある事態の「推量」を示していることが分かる。

一方、「未来」の「推量的用法」の中には、例(14)のような「譲歩」を表すとされているものもある。例(14)のBの発話に現れた「未来」は、直前のAの発話内容を受けたものではあるが、後半部分の内容から「譲歩的」な意味を持っていることが分かる。また、Escandell Vidal (2010) によれば、「譲歩」の「未来」は(14)' が示すように、“aunque+ 接続法現在”に置き換え可能だとも指摘されている。

(14) A: Juan es muy listo. フアンはとても利口だ。

B: Será (fut) muy listo, pero no estudia nada y no aprobará (fut)。 (譲歩)

とても利口だろう、でも全然勉強しないから合格しないよ。

(14)' Aunque sea (spr) muy listo, no estudia nada y no aprobará (fut)。

たとえとても利口でも、全然勉強しないから合格しないよ。 (Escandell Vidal 2010: 27)

さて、以上の「推量的用法」は「未来」の機能という観点からどのように捉えることができるのだろうか。この点について、本稿は、「未来」の「推量的用法」は当該事態の発話時に対する同時性から未来時に対する同時性への転移 (dislocación) によるものとする Rojo & Veiga (1999) の説を支持したい。その説によれば、「現在」が示す「発話時に対する同時性」の基準時が可能世界である「未来時」Fに転移されることにより、発話時に対して同時的関係を持っていた事態は可能世界において同時的関係を持つ事態を表すことになる。そして、このような「発話時」から「未来時」という可能世界への基準時の転移とともに当該文には「推量 (可能性)」という意味特徴が付加されることになるのである。これは (C) の記号で表される。

例(12)(13)(14): 当該事態の発話時に対する同時性から未来時に対する同時性への転移 (dislocación) (Rojo & Veiga 1999)

発話時に対する同時性から未来時に対する同時性への転移:

(C) OoV → FoV [推量 (可能性)]

発話時に対する同時性: OoV

未来時 (mundo posible 可能世界) に対する同時性: FoV

一方、例(14)のような「未来」の「譲歩的」意味は、相手が「現在」で主張した内容を、話し手が故意に「未来」という可能世界に対して同時関係を持つものとして提示し直すという、同一命題をめぐる相手と話し手との発話態度の一種のズレによって生じるのではないかと考えられる。なお、先にも述べたように、「未来時」における同時性を示す「未来」は状態的事態においてのみ見られる現象であることから、この「未来」の「推量的用法」も同様にもっぱら状態的事態においてのみ確認される点は看過できない⁴。

2.3. 「必然的用法」と「未来」の機能

スペイン語の「未来」にはもうひとつ、「必然的用法」と呼ばれるものがある。典型的なのは例(15)である。

- (15) Si los dos ángulos valen uno recto, el otro será (fut) ángulo recto. (Rodríguez Rosique 2017: 61)
2つの角(の和)が直角に相当するならば、もうひとつの角は直角になる。

この用法は数学の定理や科学的な記述に見られるものであるが、同用法を「未来」の機能という観点から見ると、次のように考えることができる。

例(15): 条件(文脈の因果関係)から導き出される当該事態の必然的生起: (D) SI (~Prop.&Prop.)
条件(文脈の因果関係): SI
当該事態の生起: ~Prop. & Prop. <当該事態の未成立(~Prop.)から成立(Prop.)への変化>

「必然的用法」の「未来」は「条件(あるいは文脈の因果関係)から導き出される当該事態の必然的生起」を示すということで、(D)の記号で表されることになる。この(D)は先に見た「時間的用法」の「未来」の機能を示すために用いた(A)とよく似ているが、(A)が「発話時」を基準時としていたのに対し、(D)はその部分が「条件あるいは文脈の因果関係」になっている。すなわち、「必然的用法」の「未来」は当該条件下における「当該事態の生起」を示すわけである。また、(D)の記号には(A)にあった pos という表示もないが、それはこの「必然的用法」の「未来」が「時間的用法」の「未来」とは異なり、当該事態が発話時以後に起こることを示しているわけではないことに因る。

3. スペイン語の「過去未来」の諸用法と「過去未来」の機能

本節では、スペイン語の「過去未来」の諸用法と「過去未来」の機能を、先に見た「未来」と同じ要領で見たい。まず、一般的に、スペイン語の「過去未来」には大きく分けて「時間的用法」と「法的用法」の2つの用法があると言われている。そこで、以下では「時間的用法」と「法的用法」に分けながら、「過去未来」の用法と「過去未来」の機能の関係について考察していく。

3.1. 「時間的用法」と「過去未来」の機能

「過去未来」の「時間的用法」は、例(16)(17)に見られるように、間接話法の従属節に出現するのが一般的で、自由間接話法や「語り」の文体を除き、独立文で出現することはない。

- (16) Ernesto afirmó (ps) rotundamente que asistiría (cond) a la reunión. (間接話法)
 = Ernesto afirmó rotundamente: “Asistiré (fut) a la reunión.” (Vatrican 2006: 30)
 エルネストはそのミーティングに出席するときっぱりと断言した。
- (17) Juan dijo (ps) que cuando llegara (sp) a Tokio, ya sería (cond) de noche. (作例)
 = Juan dijo: “Cuando llegue (spr) a Tokio, ya será (fut) de noche.
 フアンは、東京に到着するときには、もう夜になっていると言った。

ところで、「過去未来」の「時間的用法」も「未来」の「時間的用法」と同じく2種類ある。ひとつは例(16)の「過去未来」で、当該事態が主動詞の表す過去事態よりも後に生起することを示す。もうひとつは例(17)の「過去未来」で、これは当該事態が主動詞の表す過去事態よりも後に生起する事態と同時的關係にあることを示している。これらの「過去未来」の機能は次のような記号によって表すことができる。

例(16): 当該事態の既定の過去時以後の生起: **(E)** P (~Prop. & Prop.)^{pos} Cf. (A) O (~Prop. & Prop.)^{pos}
 既定の過去時: P(asado)
 当該事態の生起: ~Prop. & Prop. <当該事態の未成立 (~Prop.) から成立 (Prop.) への変化>
 以後: pos(terioridad)

例(16)のように、当該事態が「既定の過去時以後に生起」することを表す「過去未来」の機能は(E)の記号によって表される。Pは「既定の過去時」、そして残りの部分は先に見た「未来」の「時間的用法」の記号(A)と同じである。つまり、「過去未来」の「時間的用法」は対応する「未来」の「時間的用法」の基準時が発話時から既定の過去時にシフトしたものであるということになる。一方、例(17)のように、当該事態が「既定の過去時から見た未来時に対する同時性」を表す「過去未来」の機能は次の(F)の記号によって表される。

例(17): 当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性: **(F)** PFoV Cf. (B) FoV
 既定の過去時から見た未来時: P(asado)F(uturo)
 [dijo (=P) que] cuando llegara a Tokio (=PF)
 同時性: oV <当該事態の現在形による表出> = ya es de noche

PFは既定の過去時から見た未来時を表し、例(17)では cuando llegara a Tokio がそれに相当する。そして残りの部分は、先に見た「未来」の例(4)の「時間的用法」の(B)と同じである。すなわち、「過去未来」のこの「時間的用法」も対応する「未来」の「時間的用法」の基準時が発話時から見た未来時から既定の過去時から見た未来時にシフトしたものであるということになるのである。ところで、先にも述べたように、過去未来の「時間的用法」が原則従属的文脈にしか出現しないという点は注意すべきである。なぜなら、次に見る「過去未来」の「法的用法」は、逆に、独立文で出現することが多いからである。

3.2. 「法的用法」と「過去未来」の機能

さて、次に過去未来の「法的用法」と「過去未来」の機能との関係を見ていく。過去未来の「法

的用法」について、Vatrican (2006) は、「非事実 (condicional no factual)」「丁寧・緩和 (condicional de cortesía y/o de atenuación)」「推量 (condicional de conjetura)」「伝聞 (condicional de rumor)」の4種類があると述べているが、以下ではこの順に見ていく。

3.2.1. 「非事実」を表す「過去未来」と「過去未来」の機能

過去未来の「法的用法」のうち「非事実」と呼ばれるものは、例(18)(19)のように、条件文の帰結節に出現する「過去未来」を指す。このうち例(18)の帰結節に出現した「過去未来」を Vatrican (2006) は potencial (潜在的) な「過去未来」、例(19)の帰結節に出現した「過去未来」を irreal (非現実) な「過去未来」と呼んでいる。

- (18) Si hablaras (sp) con él, se arreglarían (cond) las cosas. (Vatrican 2006: 45)
君が彼と話しをすれば、それらのことは調整されるだろうが。〈潜在的 (potencial)〉
- (19) Si los hombres fueran (sp) mujeres, todo sería (cond) fácil. (Ibid.)
男性が女性なら、すべては容易になるのだろうが。〈非現実 (irreal)〉

さて、「過去未来」の「法的用法」の「非事実」と呼ばれるもののうち、例(18)のような「過去未来」の機能は、「潜在的条件から導き出される当該事態の生起」を示すことであり、それは (G) の記号で表されることになる。

例(18)：潜在的条件から導き出される当該事態の生起：(G) POTSI(~Prop.&Prop.)

潜在的条件：POT(encial)SI

当該事態の生起：~Prop. & Prop. 〈当該事態の未成立 (~Prop.) から成立 (Prop.) への変化〉

このうち POTSI は「潜在的条件」を表し、残りの部分は「当該事態の生起」を表す。一方、例(19)のような「過去未来」の機能は、「非現実の条件から導き出される当該事態の生起」を示すことであり、同じく (G) の記号で表される。このうち IRSI は「非現実の条件」を表し、残りの部分は「当該事態の生起」を表すことになる。つまり、例(18)の「過去未来」と例(19)の「過去未来」の違いは想定される条件の質の違いということになる。

例(19)：非現実の条件から導き出される当該事態の生起：(G) IRSI(~Prop.&Prop.)

非現実の条件：IR(real)SI

当該事態の生起：~Prop. & Prop. 〈当該事態の未成立 (~Prop.) から成立 (Prop.) への変化〉

3.2.2. 「丁寧・緩和」を表す「過去未来」と「過去未来」の機能

上で見た「非事実」の「過去未来」と連続した用法とも言えるのが、本項で見る「丁寧・緩和」用法である。具体例は、例(20)(21)であるが、その日本語訳からも分かるように、いずれも発話時に展開する事態に言及したものである。

- (20) ¿Me podrías (cond) acercar la fuente? (Vatrican 2006: 56)

- その大皿取ってくれる？ 〈丁寧〉
 (21) Yo diría (cond) que mide casi dos metros. (Ibid.)
 私は彼の身長はほとんど2メートルと言いますが。 〈緩和〉

この「丁寧・緩和」の「過去未来」の機能は「非明示的な潜在的条件から導き出される当該事態の生起」を示すことであり、(G)'の記号で表すことができる。というのも、この用法は前に見た「非事実」用法の[POT(encial)SI]が非明示であることを除けば、「非事実」用法と同じものと考えられることができるからである。なお、潜在的条件が非明示であることを示すために[POT(encial)SI]には{ }がつけられている。

例(20)(21)： 非明示的な潜在的条件から導き出される当該事態の生起：(G)' {POTSi} (~Prop. & Prop.)

非明示的な潜在的条件：{POT(encial)SI}

当該事態の生起：~Prop. & Prop. 〈当該事態の未成立(~Prop.)から成立(Prop.)への変化〉

しかし、それでは、「丁寧・緩和」の過去未来の機能におけるこの非明示の潜在的条件とはどのようなものなのだろうか。それを補ってみると、次のようになろう。

- (20)' ¿Me podrías (cond) acercar la fuente?
 = ¿Me podrías acercar la fuente [si te lo pidiera (sp)]?
 [もし私があなたに頼んだら] その大皿取ってくれる？
 (21)' Yo diría (cond) que mide casi dos metros. (Ibid.)
 =Yo diría (cond) que mide casi dos metros [si me lo preguntaras (sp)].
 [もしあなたが私にそれを尋ねるのなら] 私は彼の身長はほとんど2メートルと言いますが。

もちろん(20)'の[si te lo pidiera (もし私があなたに頼んだら)]、(21)'の[si me lo preguntaras (もしあなたが私にそれを尋ねるのなら)]が当該「過去未来」が出現するための唯一の条件ではなく、帰結節の意味に相反しない限り、様々な条件が想定されうる。ここで重要なのは、当該「過去未来」の出現の背景にはそれを可能にするような潜在的条件が存在するという点である。

3.2.3. 「推量」を表す「過去未来」と「過去未来」の機能

さて、次に「過去未来」の「推量」用法を見る。その典型例は例(22)(23)である。これらの例が示すように、この用法の「過去未来」は「たぶん」を示す副詞 *probablemente* を伴った「線過去」あるいは「点過去」の文に置換することができる。

- (22) En aquel entonces Juan ya tendría (cond) más de 30 años. (作例)
 あの当時フアンはもう30歳を過ぎていただろう。
 ≒ En aquel entonces *probablemente* Juan ya *tenía (imp) más de treinta años.*
 あの当時たぶんフアンはもう30歳を過ぎていた。

- (23) Juan llegaría (cond) ese día un poco más tarde. (Vatrican 2006: 68に主語追加)
 フアンはその日は少し遅く到着しただろう。
 ≡ Probablemente Juan llegó (ps) ese día un poco más tarde.
 たぶんフアンはその日は少し遅く到着した。

このような「推量」用法は、以下の (H) の記号が示すような「過去未来」の機能から生じたものと考えられる。

- 例(22): 当該事態の既定の過去時に対する同時性 (PoV) から既定の過去時から見た未来時に対する同時性 (PFoV) への転移: (H) PoV → PFoV [推量 (可能性)]
 既定の過去時に対する同時性: P (既定の過去時) oV = P (en aquel entonces) oV
 既定の過去時から見た未来時 (mundo posible 可能世界): PF
 既定の過去時から見た未来時に対する同時性: PF oV
 既定の過去時に対する同時性から既定の過去時から見た未来時に対する同時性への転移:
 PoV → PFoV [推量 (可能性)]
 PoV = ya tenía más de 30 años → PFoV [推量 (可能性)] ya tendría más de 30 años

まず、例(22)については、「当該事態の既定の過去時に対する同時性から、既定の過去時から見た未来時に対する同時性への転移」によるものと解釈される。そして、そのような基準時の転移と共に、当該事態には「推量 (可能性)」という意味特徴が付加されることになるのである。これは、「推量」という意味特徴が付加されるのが「既定の過去時」に対して同時関係を持つ事態という点を除けば、先に見た「未来」の「推量」用法に適用されたのと同じくメカニズムによるものと言える。

一方、例(23)の「過去未来」の「推量」用法は、「当該事態の未成立から成立への変化」を前提としているという点で特異であり、「未来」の「推量」用法には見られなかったものである⁵。本稿では、この用法は「当該事態の発話時以前における生起から、既定の過去時から見た未来時以前における生起への転移」という「過去未来」の機能によるものと解釈し、以下の (I) の記号で表すことにする。

- 例(23): 当該事態の発話時以前における生起から、既定の過去時から見た未来時以前における生起への転移: (I) O(~Prop.&Prop.)^{ant} → PF(~Prop.&Prop.)^{ant} [推量 (可能性)]
 発話時以前における事態の生起: O(~Prop.&Prop.)^{ant}
 以前: ant (erioridad)
 既定の過去時から見た未来時 (mundo posible 可能世界): PF
 既定の過去時から見た未来時以前における事態の生起: PF(~Prop.&Prop.)^{ant}
 当該事態の発話時以前における生起 (O(~Prop.&Prop.)^{ant}) から既定の過去時から見た未来時以前における生起 (PF(~Prop.&Prop.)^{ant}) への転移:
 O(~Prop.&Prop.)^{ant} → PF(~Prop.&Prop.)^{ant} [推量 (可能性)]
 O(~Prop.&Prop.)^{ant} = llegó un poco más tarde → PF(~Prop.&Prop.)^{ant} = llegaría un poco más tarde

(I)の記号によれば、例(23)の「過去未来」の用法は、当該事態の生起の基準時が「発話時」から「既定の過去時から見た未来時」という可能世界へ転移されたことによって引き起こされたもので、他の「推量用法」と同じく、基準時が可能世界に転移されたことにより、「推量（可能性）」という意味特徴が付加されたと考えることができる。

3.2.4. 「伝聞」を表す「過去未来」と「過去未来」の機能

最後に、「過去未来」の「伝聞」用法と呼ばれるものを見る。例(24)を見られたい。

- (24) Sevilla tendría (cond) próximamente carrera de psicología para los jóvenes que deseen estudiar esta carrera en el municipio. (Canal Vivavisión. 08/07/2014, Vatrican 2006: 78)
セビージャはまもなく当市で心理学を学びたいと願っている若者たちのために心理学課程を設けるとのことである。

同用法について、RAEが2009年に発行したNGLEはその存在を認めてはいるものの、同用法が出現しやすいと言われるジャーナリズムのマニュアルではこの用法は推奨されていない⁶。

このように、「過去未来」の「伝聞用法」の妥当性についてはいまだ議論があり、その解釈についてもいろいろある。そのひとつは、例(24)'のように、「伝聞用法」を間接話法の従属文中に出現する過去未来と関係づけるものである。

- (24)' Alguien dijo que Sevilla tendría (cond) próximamente carrera de psicología (...)
誰かがセビージャがまもなく心理学課程を設けると言った。

一方、Vatrican (2006: 79)は、「伝聞用法」の「過去未来」では、話し手は当該事態の真偽にコミットせず、“el condicional puede subordinarse a una prótasis que se relaciona con la fuerza ilocutiva de la frase, esto es, con una condición del tipo “si se confirma el rumor, si esto es cierto”.”（「過去未来」は句の発話行為の力に関係する条件節、すなわち、「もしその噂が確認されるならば、もしこれが確かであれば」といったタイプの条件文に従属されうると述べ、例(24)を次のように解釈している。

- (24)" Si es verdad lo que dicen, Sevilla tendría (cond) próximamente carrera de psicología (...)
もし噂が本当ならば、セビージャはまもなく心理学課程を設けるとのことである。

しかしながら、Vatricanの(24)"の解釈はあまり説得的ではない。なぜならば、少なくともスペイン語においては、“si se confirma el rumor, si esto es cierto（もしその噂が確認されるならば、もしこれが確かであれば）”といった「現在」によって表出された条件節の帰結節には必ずしも「過去未来」が出現するわけではなく、「未来」が出現することも多いからである。

また、ここで特に看過できないのは、スペイン語には例(25)のような、「過去未来」の「伝聞用法」のほかに、例(21)のような、「未来」の「伝聞用法」とも呼べそうな用法があるということである。問題は、このいずれもが発話時以後に生起する事態に言及し、その情報源もいずれも話し手以外にあるにも関わらず、一方では「過去未来」、もう一方では「未来」が出現しているという点である。つまり、例(25)の「過去未来」と例(26)の「未来」の違いはどのようなもので、それはどの

ように説明できるのかを明らかにする必要があるのである。

- (25) Según fuentes estadounidenses, Jimmy Carter podría (cond) trasladarse mañana domingo a Sarajevo, (...) (CREA, *La Vanguardia*, 17/12/1994)⁷
合衆国側の情報筋によると、ジミー・カーターは明日日曜にサラエボに移動するかもしれない / 移動することができるとのことである。
- (26) Según fuentes oficiosas de la Comisión Europea, los primeros envíos (...) podrán (fut) llegar a Polonia entre hoy y mañana, (...) (CREA, *El País*, 17/12/1980)
ヨーロッパ委員会の非公式な筋の情報によれば、最初の発送（中略）は今日明日中にポーランドに届くかもしれない / 届くことができる、（中略）。

この点について、本稿は、「過去未来」の「伝聞用法」は「法的用法」のひとつというよりはむしろその「時間的用法」の拡張と捉えられるのではないかと考える。つまり、例(25)は例(25)'が示すような「合衆国側の情報筋はジミー・カーターが明日日曜日に移動するかもしれない / 移動することができるだろうと言った / 確認した」といった文に置換できるのではないかということである。

- (25)' Fuentes estadounidenses [dijeron/confirmaron (ps) que] Jimmy Carter podría (cond) trasladarse mañana domingo a Sarajevo, (...) 合衆国側の情報筋はジミー・カーターが明日日曜日に移動することができる [と言った / 確認した]⁸

とはいえ、例(25)の「過去未来」が3.1.で指摘した「間接話法の従属節に出現するのが一般的で、自由間接話法や「語り」の文体を除き、独立文で出現することはない」という原則を犯している点は無視すべきではない。本稿は、このような原則の違反が、「過去未来」のいわゆる「伝聞用法」がスペイン語に浸透することを難しくする一要因になっているのではないかと思う。

一方、本稿は、例(26)のように、一見「伝聞用法」に見える「未来」の用法も、例(26)'「ヨーロッパ委員会の非公式な情報筋は最初の発送は今日明日中にポーランドに到着できると言っている / 確認している」といった文に転換可能な、「未来」の「時間的用法」の拡張と言えるのではないかと考える。そのように考えれば、次のように、「過去未来」の「伝聞用法」と「未来」の「伝聞用法」の当該事態に対する話し手のコミットの違いが説明できることになるからである。

- (26)' Fuentes oficiosas de la Comisión [dicen/confirman (pr) que] los primeros envíos (...) podrán (fut) llegar a Polonia entre hoy y mañana. ヨーロッパ委員会の非公式な情報筋は、最初の発送は今日明日中にポーランドに到着することができる [と言っている / 確認している]⁹

つまり、「過去未来」のいわゆる「伝聞用法」において、話し手が当該事態の真偽にコミットしないように見えるのは、「過去未来」が本来既定の過去時(P)、つまり、話し手が直接関与しない非発話時基準の時制であるからであり、一方、「伝聞用法」に見える「未来」の用法において、話し手が当該事態の真偽にコミットしているように見えるのは、それが話し手の直接関与する発話時基準(O)

の時制であることに因る、と考えることができるのである¹⁰。以上の「過去未来」と「未来」の基準時の違いは、両形式の機能を示した次の図1の太字OとPによって示される。

過去未来：P(~Prop.&Prop.)^{pos} 未来：O(~Prop.&Prop.)^{pos}
 PFoV FoV

図1：「過去未来」と「未来」の基準時の違い

4. まとめ：スペイン語の「未来」と「過去未来」の機能的類似点と相違点

以上、スペイン語の「未来」「過去未来」の諸用法と「未来」「過去未来」の機能の関係について見てきたが、それらをもとに「未来」と「過去未来」の機能の類似点と相違点をまとめると表1および表2になる。

表1：スペイン語の「未来」の諸用法と「未来」の機能

| 未来の諸用法 | 未来の機能 |
|--------|---|
| 時間的用法 | <ul style="list-style-type: none"> 当該事態の発話時以後の生起：(A) O(~Prop. & Prop.)^{pos} 当該事態の既定の未来時に対する同時性：(B) FoV |
| 推量的用法 | <ul style="list-style-type: none"> 当該事態の発話時に対する同時性から未来時に対する同時性への転移：(C) OoV → FoV [推量 (可能性)] |
| 必然的用法 | <ul style="list-style-type: none"> 条件から導き出される当該事態の必然的生起：(D) SI(~Prop.&Prop.) |

表2：スペイン語の「過去未来」の諸用法と「過去未来」の機能

| 過去未来の諸用法 | 過去未来の機能 |
|-----------------|---|
| 時間的用法 | <ul style="list-style-type: none"> 当該事態の既定の過去時以後の生起：(E) P(~Prop. & Prop.)^{pos} 当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性：(F) PFoV |
| 時間的用法拡張 (伝聞) | <ul style="list-style-type: none"> 当該事態の非明示の既定の過去時以後の生起：(E)' {P} (~Prop. & Prop.)^{pos} 当該事態の非明示の既定の過去時から見た未来時に対する同時性：(F)' {PF} oV |
| 法的用法：非事実 | <ul style="list-style-type: none"> 潜在的あるいは非現実の条件から導き出される当該事態の生起：(G) POTSI/IRSI(~Prop.&Prop.) |
| 法的用法： 丁寧・緩和 | <ul style="list-style-type: none"> 非明示の潜在的条件から導き出される当該事態の生起：(G)' {POTSI} (~Prop.&Prop.) |
| 法的用法：推量 | <ul style="list-style-type: none"> 当該事態の既定の過去時に対する同時性から既定の過去時から見た未来時に対する同時性への転移：(H) PoV → PFoV [推量 (可能性)] 発話時以前における事態の生起から既定の過去時から見た未来時以前における生起への転移：(I) O(~Prop.&Prop.)^{ant} → PF(~Prop.&Prop.)^{ant} [推量 (可能性)] |

これらの表からは、「未来」と「過去未来」はいずれも「当該事態の未成立から成立への変化 (~Prop.&Prop.)」という「点過去」と共通の特徴、また、「当該事態の基準時に対する同時性 (oV)」という「線過去」「現在」と共通の特徴を持つことが分かる。一方、「未来」は発話時基準 (O) あるいは既定の未来時基準 (F) の時間関係を示すのに対し、「過去未来」は既定の過去時基準 (P) あるいは既定の過去時から見た未来時基準 (PF) の時間関係を示すという違い、つまり、両者が示す時間関係の「基準時」には違いがある点も分かる。さらに、「未来」と「過去未来」の「推量用法」は、対応する時制の基準時が現実世界から非現実の可能世界へ転移された結果生じるものであるということも分かる。以上のことをまとめるならば、スペイン語の「未来」の機能と「過去未来」の機能は基本的に並行したものであり、その違いはもっぱら「基準時」にあるということになる。

注

- * 本稿は2019年5月23日成城大学で開催された日本フランス語学会2019年度シンポジウム「ポルトガル語、スペイン語、フランス語の時制と叙法の対照・比較」の中で「スペイン語の「未来」と「過去未来」—その機能的異同について—」という題目で発表した内容を修正・加筆したものである。なお、本稿は JSPS 科研費 JP18H00667 の助成を受けている。
- 1 本稿の言うスペイン語の「未来」とは RAE y ASALE (2009) において *futuro simple de indicativo* (直説法単純未来) と名付けられた動詞形式を指し、「過去未来」とは同じく RAE y ASALE (2009) において *condicional simple de indicativo* (直説法単純条件) と名付けられた動詞形式を指す。なお、「過去未来」という名称は、日本のスペイン語教育において当該形式を指す際に通常用いられているものである。
- 2 しかし、スペイン語の「過去未来」に相当するイタリア語の「条件法現在」は“不定詞 + *habui* (*habere* 完了過去形)”に由来する。また、ルーマニア語の「未来」には意志動詞 “*vrea* ‘want’ + 不定詞” の組み合わせからなるもの (例えば、*voi merge* ‘I will go’) と義務動詞 “*avea*+ 接続法現在” の組み合わせからなるもの (例えば、*am să merg* ‘I have to go, I must go’) があり、スペイン語の「過去未来」に相当する「条件法現在」は義務動詞 “*avea*+ 不定詞” からなる (例えば、*Aș face-o dacă aș putea* ‘I would do it if I could’)
- 3 以下、用例に出現した当該の「未来」は *fut* と下線、当該の「過去未来」は *cond* と下線で示す。また、対応する日本語部分にも同様に下線を引く。
- 4 しかしながら、RAE y ASALE (2009: 23.14j) は、「未来」の「推量用法」は状態的事態ではなく、非限界的事態 (*predicados atélicos*) に特有のものであるとしている。
- 5 例 (23) に見られるような「過去未来」の用法は、スペイン語の「過去未来」に相当する他のロマンス諸語の形式には確認されないという点でも、きわめて特異なものと言える。
- 6 Vatrican (2006: 76-77) によれば、「伝聞用法」の「過去未来」が拒否される理由は2つあると言う。ひとつは、同用法がフランス語あるいは英語という他の言語からの “*calco* (借用)” であること、もうひとつの理由は、同用法が確認されていない噂をニュースとして伝えることに繋がる点である。
- 7 CREA (Corpus de referencia del español actual) は RAE が制作したスペイン語圏のスペイン語資料を網羅したデータベース。最終アクセス日は2019年5月20日。
- 8 主動詞に「確認した」とあるので「移動することができる」と訳した。

- 9 主動詞に「確認している」とあるので「到着することができる」と訳した。
10 Cf. Sarrazin (2010)

参 考 文 献

- Escandell Vidal, M.V. (2010): “Futuro y evidencialidad”, *Anuario de Lingüística Hispánica*, XXVI, 9-34.
Real Academia Española y Asale (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa.
Rodríguez Rosique, S. (2017): “The Future of Necessity in Spanish: Modality, Evidentiality and deictic Projection at the Crossroads”, Marín-Arrese, J., *et al.* (eds), *Evidentiality and Modality in European Languages*, 57-86.
Rojo, G. & Veiga, A. (1999): “El tiempo verbal. Los tiempos simples.”, en Bosque, I.& Demonte, V. (eds.) *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, 2867-2934, Madrid: Espasa-Calpe.
Sarrazin, S. (2010): “Le conditionnel journalistique espagnol: du modèle français aux nouveaux usages”, *Cahiers de LALFS*, 16 (1), 99-128.
Vatrican, A. (2006): *El condicional en español*, Madrid: ArcoLibros, S.L.
山村ひろみ (2004): 「futuro と pretérito perfecto simple /pretérito imperfecto の関係—機能的対比の観点から—」, *HISPANICA* 48, 31-47.

資 料 体

- REAL ACADEMIA ESPAÑOLA: Banco de datos (CREA) [en línea]. Corpus de referencia del español actual. <<http://www.rae.es>> [最終アクセス日2019年5月20日]

El futuro simple y el condicional simple en español

—en torno a sus similitudes y diferencias funcionales—

Hiromi YAMAMURA

Según la *Nueva gramática de la lengua española*, tanto el paradigma CANTARÉ denominado *futuro simple* (de aquí en adelante, futuro) como el paradigma CANTARÍA denominado *condicional simple* (de aquí en adelante, condicional) pertenecen al mismo modo *indicativo*. Hasta que la Real Academia Española decidió tales nomenclaturas, hubo no pocas discusiones, la mayoría de las cuales giraba en torno a qué categoría deberían pertenecer dichos dos paradigmas, es decir, a la categoría temporal o a la modal. Sin embargo, lo que más llama la atención es que durante las discusiones el futuro y el condicional no se hayan tratado por separado sino siempre en conjunto. Es decir, la pregunta era si el futuro y el condicional en conjunto debían considerarse en la categoría temporal o en la modal. Eso sugiere que en la lingüística española nunca se ha cuestionado que desde el punto de vista funcional el futuro y el condicional se puedan tratar separadamente. Así pues, en el presente trabajo se ha intentado comprobar qué similitudes y diferencias funcionales hay entre los dos paradigmas en cuestión. El resultado se resume como sigue:

- El futuro y el condicional tienen la característica funcional que comparten con el pretérito perfecto simple, la cual consiste en denotar “el cambio de no-surgimiento a sí-surgimiento de la proposición en cuestión”.
- El futuro y el condicional tienen la característica funcional que comparten con el pretérito imperfecto y el presente, la cual es denotar “la simultaneidad de la proposición en cuestión con su tiempo de referencia”.
- El futuro denota la relación temporal de posterioridad cuyo tiempo de referencia está en el momento del habla o la relación temporal de simultaneidad cuyo tiempo de referencia está en algún tiempo posterior al momento del habla. Por otro lado, el condicional denota la relación temporal de posterioridad cuyo tiempo de referencia está en algún tiempo anterior al momento del habla o la relación temporal de simultaneidad cuyo tiempo de referencia está en algún tiempo posterior al tiempo que, a su vez, es anterior al momento del habla.
- Los usos no-temporales tanto del futuro como del condicional se pueden explicar por la *dislocación temporal* propuesta por Rojo y Veiga (1999), según la cual el tiempo de referencia de la forma verbal correspondiente al futuro o al condicional se traslada del mundo real al mundo posible.

De lo expuesto arriba se puede decir que la función del futuro y la del condicional son fundamentalmente paralelas y la diferencia entre ellas está en el tiempo de referencia en el que está basada la relación temporal denotada por cada uno de estos dos paradigmas.